
[成果情報名] カキ「早秋」の結果特性

[要約] カキ「早秋」は、長さ10cm以上20cm未満の結果母枝でも花蕾が確保できる。20cm未満の結果母枝や20cm以上の結果母枝の下位節から発生した新梢では、結果率は高い傾向がみられる。長さ20cm以上40cm未満の新梢では、結果率が高く果実品質も劣らない。

[キーワード] カキ、早秋、結果率、結果母枝、新梢

[担当部署] 果樹部・果樹育種チーム

[連絡先] 電話 092-922-4946

[対象作物] 果樹

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

カキ「早秋」は、種子形成力が弱く単為結果性が低いため、早期生理落果が多く生産が不安定である。そこで、結果量の安定確保の基礎資料とするため、結果母枝や新梢の長さの違いが着花数や結果率、果実品質に及ぼす影響を明らかにする。

(要望機関名：朝倉普 (H13))

[成果の内容・特徴]

1. 長さ10cm以上20cm未満の結果母枝では、頂芽から第2芽付近まで花蕾が着生し、結果母枝当たり7個程度の花蕾が着生する。長さが20cmを越える結果母枝では、結果母枝当たり着花数が多く、第5芽より下位節にも花蕾が着生する(表1)。
2. 長さ10cm以上20cm未満の結果母枝の上位節や20cm以上の結果母枝の下位節から発生する新梢は長さが概ね20~30cm程度で、結果率が比較的高い。また、短い結果母枝は結果率が高い傾向がみられる(図1、一部データ略)。
3. 長さ40cm未満の新梢では、40cm以上のものよりも結果率が高い(図2)。
4. 新梢長が短いと果重は軽くなるが、20cm以上の新梢ではその差は小さい。その他の果実品質には新梢の長さによる違いはみられない(表2)。

[成果の活用面・留意点]

1. カキ「早秋」におけるせん定時の結果母枝選定の参考資料として活用できる。
2. 結果量を多く確保するためには、20cm未満の短い結果母枝をやや多く配置する。また、20cm以上の結果母枝を利用する場合には、長さや充実度に応じて先端を先刈りすることで、摘蕾作業の省力化を図ることができる。
3. カキ「早秋」は樹勢が強過ぎると枝の伸長が旺盛になり、結果率が低下するので、肥培管理等に注意し、適切な樹勢を維持するように注意する。

[具体的データ]

表1 「早秋」の結果母枝長と着花数(平成14～17年)

結果母枝長	結果母枝上の発芽節位						結果母枝当 たり着花数
	頂芽	第2芽	第3芽	第4芽	第5芽	第6芽	
10cm以上20cm未満	3.7	2.2	0.7	0.2	0.0	0.0	6.8
20cm以上40cm未満	3.9	3.6	2.6	1.9	1.3	1.5	14.8
40cm以上	4.5	4.2	3.5	3.0	2.9	7.4	25.5

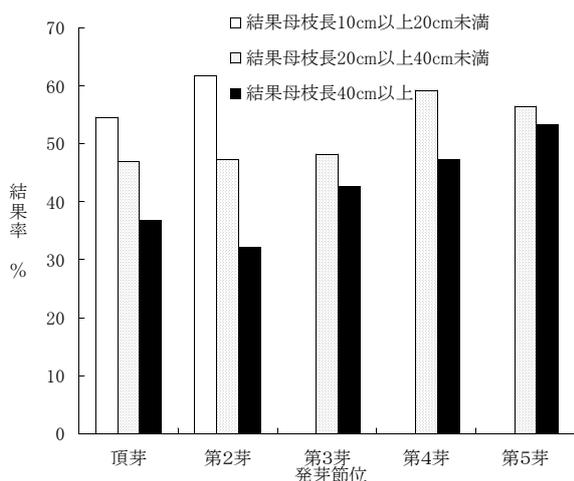


図1 結果母枝の発芽節位と結果率(平成14～17年)

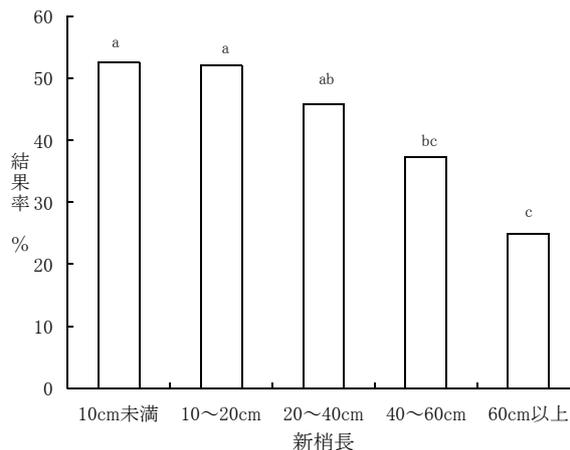


図2 新梢長と結果率(平成14～17年)

注)アルファベットは異符号間にTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり。

表2 「早秋」の新梢長と果実品質

新梢長	果重 g	果皮色			果実 糖度 %	果頂 裂果	条紋	へた すき	種子 数 個
		果頂	赤道	果底					
10cm未満	203b	6.8	5.9	5.1	16.4	0.8	0.3	0.1	2.3
10cm以上～20cm未満	208ab	6.3	5.5	4.9	16.2	0.7	0.3	0.1	1.5
20cm以上～40cm未満	224ab	6.1	5.4	4.9	16.1	1.0	0.2	0.1	2.1
40～60cm	232ab	6.1	5.5	4.9	15.7	1.0	0.2	0.2	2.2
60cm以上	237a	6.2	5.5	4.8	16.0	1.0	0.1	0.1	1.9

注) 1. 収穫日は平成17年9月28日

2. 果皮色はカキ用カラーチャートで測定した。

3. へたすきおよび条紋は0(無)～3(多)で、果頂裂果は0(無)～4(多)で指数化し
平均値で示した。

4. アルファベットは異符号間にTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり。

[その他]

研究課題名：カキ新品種「早秋」の高品質安定生産技術の確立

予算区分：経常

研究期間：平成17年度(平成14～18年)

研究担当者：千々和浩幸、平川信之、矢羽田二郎、松田和也